

お知らせ > ワクチン接種業務の支援を開始 > COVID-19最新情報はこちら！

[医師TOP](#) > [谷口恭の「梅田のGPがどうしても伝えたいこと」](#) > [これからの大麻の話をしよう](#)

谷口恭の「梅田のGPがどうしても伝えたいこと」

連載をフォロー

これからの大麻の話をしよう

2021/06/30

谷口 恭 (太融寺町谷口医院)

プライマリケア

大麻 違法薬物

印刷

0

本連載では繰り返し（違法）薬物の問題について問題提起をしてきた。覚醒剤、ブロン、ベンゾジアゼピン、鎮痛薬などを取り上げ、（狭義の）麻薬についてはタイのメサドン療法や寺で実施されている特殊な治療について紹介したこともある。今回のテーマは「大麻」。

依存症に詳しい英国のジャーナリスト、ヨハン・ハリ氏が最近上梓した『麻薬と人間100年の物語』では、日本は大麻よりも覚醒剤を摂取する人口が多いまれな国と述べられている。また、薬物に詳しい心理学者の原田隆之氏の著書『あなたもきっと依存症「快と不安」の病』でも、日本では大麻よりも覚醒剤がまん延していると指摘されている。

だが、僕は彼らのこの指摘は事実ではないと思っている。検挙されないから正確な実態が把握できていないだけで、実際には若者を中心としたかなりの日本人が大麻を使用しているのは間違いない、と僕は思っている。僕の印象としては日本人の大麻使用者は少なくとも覚醒剤の10倍以上にはなる。

これは医師としての体験から言っているのではなく、医師になる10年以上も前の一つ目の大学生の頃の経験からそう考えている。僕自身に使用歴はないが（過去にも述べたように、いざというときに根性のない僕はブロンやベンゾジアゼピンにも手を出したことがない）、周囲の薬物にはまっぴい悪友たちは「ハルシオンよりも大麻の方が簡単に手に入る」と豪語していた。

では、なぜ調査しても正確な数字が反映されず大麻使用者の実態が明らかにならないのか。答えは簡単で、「誰も真実を話さないから」だ。うかつに大麻の経験があるなどと言ってしまえば情報が漏れて逮捕されるかもしれない。個人使用なら実刑をくらうことはないにせよ、生涯にわたり「大麻使用者」のレッテルを貼られて生きていくリスクを取るようなばかなことは誰もしないというわけだ。

だが、若者の薬物摂取の実態にせまった貴重な研究もある。2013年1月に [Psychiatry and Clinical Neurosciences](#) 誌に掲載された日本人を対象とした研究によると、東京のレイヴパーティーに参加していた若者に匿名でアンケートをした結果、32.7%にも上るのだ。

レイヴパーティーに参加するのは大学生だけではないし、全てのパーティーに参加するわけでもないが、都心部の大学生に匿名で（絶対に身が保障され）同様の調査が行われたとしたら、ここまで高くはないの何十倍もの若者が「経験あり」と答えるのではないだろうか。

今なら早期割引特価が適用されます

2020年のコロナ禍でも過去最高収益を達成した“最強クリニック”の経営術や運営ノウハウが満載！「そのまま使える」ツールやデータもDVDに多数収録しました。院長必携の1冊です。

新刊「最強」のクリニック経営術
日経ヘルスケア

最近のメディアの報道では大麻使用者が増えたような表現も目立つ。2021年4月8日、警察庁は2020年の大麻取締法違反の摘発が過去最高の5034人となったことを発表した。しかし「過去最高」なのは「摘発」であり「実際の使用者数」ではない。同年の覚醒剤の検挙は8471人と同日に発表されたが、これは、「検挙数」が「覚醒剤>大麻」であることを言っているだけであり、「実際の使用者数」は「大麻>>>覚醒剤」だろう。ちなみに、先述の東京における研究では覚醒剤ユーザーは6.3%で大麻ユーザーの5分の1以下でしかない。

「海外では合法」の落とし穴

後述するように、ウルグアイや米国の一部の州だけでなくカナダ全域で嗜好用大麻が完全合法化されたことが日本の若者を大麻へ近づけたという指摘は間違っていない。だが、僕が1つ目の大学生の80年代後半から、大麻はブロンと同じくらい「敷居」は低かった。確かに80年代には米国でも豪州でも大麻は違法であったが、これらの国へ留学に行った大学生の何割かは地元の大学生に誘われて使用していた。その後、沢木耕太郎の『深夜特急』、さらに猿岩石のテレビ番組などで「バックパッカー」が流行し、若者が一斉に海外に飛び出すようになり、大麻は一気に身近な嗜好品となった、というのが僕の分析だ。



海外渡航者だけではない。大麻は国内でも栽培できる。東北地方や北海道では天然の大麻草が生えているところがあると聞く。関西でもベランダで育てることは可能だ。過去のコラム（[大勢の覚醒剤使用者をみてきて考えること](#)）で触れた、覚醒剤に溺れた女性医師は大阪市内の自宅のベランダで大麻草を育てていた。以前、警察関係の知人に聞いた話では、団地のベランダで栽培されている大麻草が電車の窓から偶然見つけられることもあるそうだ。

僕が過去にアルバイト先で知り合った30歳代の男性はアパートの一室を「栽培ルーム」にしていると教えてくれた。エアコン、加湿器、植物育成ライトなどを駆使し、至適の温度、湿度、日照時間を「研究」として自慢していた。ちなみに、この男性の最大の悩みは「高額な光熱費」とのことだった。実際、光熱費が不自然なほど高額なことから大麻栽培が疑われて逮捕に至ることもあるらしい。

なお、2018年には大分県の40歳代男性医師が自宅で大麻草8株を育てていたことが発覚し逮捕されている。

ここで（嗜好用）大麻擁護者の意見をまとめておこう。昔からよく言われるのが、オランダの「コーヒーショップ」では合法、カンボジアでは食品品（大麻入りピザは渡航者の“名物”）、インドのバラナシには大麻入りラッシーが普通に売られている（これもバラナシの“名物”）などで、一部の国では合法（もしくは事実上合法）なものが日本で違法なのはおかしい、というものだ。また、大麻愛好家が決まって言うセリフが「アルコールのような依存性が強く危険なものが合法なのだから」で、「健康のためにも大麻だけにすべきだ」とうそぶく者は昔も今も少なくない。実際には

最近では診察室でバックパッカーや海外留学希望の学生からも「ナよ」と言われることが多い。実際、世界の流れは医療用のみならず嗜好品化だ。口火を切ったのが2013年のウルグアイ。画期的だったのは個人消費や売買までOKとされたことだ。翌年1月には米国コロラド州が嗜好

今なら早期割引特価が適用されます

2020年のコロナ禍でも過去最高収益を達成した“最強クリニック”の経営術や運営ノウハウが満載！「そのまま使える」ツールやデータもDVDに多数収録しました。院長必携の1冊です。

新刊「最強」のクリニック経営術
日経ヘルスケア

速され、米国全域で嗜好用大麻が合法化されるのも時間の問題だ、という声もある。

先述したようにカナダでは2018年10月17日に「The Cannabis Act」が施行され嗜好用大麻が合法化された。カナダ渡航者の情報によると、大麻ショップはまるでおしゃれなブティックやカフェのようで、外国人は違法だという話もあるが、実際には日本人でも簡単に利用できるらしい（ただし、新型コロナウイルス感染症 [COVID-19] 流行以降、日本人はこういったショップを利用しづらくなったという話もある）。

なお、大麻愛好家が求めているのは言うまでもなく嗜好用大麻であり医療用大麻とは区別される。医療用大麻についてもいずれ本連載で取り上げたいが今回は言及しない。

さて、ここからは大麻に対する僕の考えを述べる。当院にある程度長く通院している若い患者や最近では海外留学前の若者からも大麻に関する質問を受ける機会が増えてきた。僕が一貫して言い続けているのは「最終的には自分で判断すればいいが、健康で若い間は大麻には手を出すべきでない」というものだ。これは大麻だけでなく、フィジー（COVID-19流行以前は人気の留学先）のカバ、ソマリアなど北東アフリカ（こちらはバックパッカーが大半）のカートについても言えることで「『現地では合法』という言葉に惑わされてはいけない」と言い続けている。その理由は2つある。

1つは、大麻（やカバやカート）がハードドラッグの入り口になりやすいから、つまり「ゲートウェイ仮説」だ。「大麻以外は（アルコールやタバコも含めて）興味がない」という者も多いが、実際には大麻がマジックマッシュルーム、MDMA、覚醒剤などに手を出さずきっかけになっている者も少なくはない（ただしマジックマッシュルームはデンバーで2019年5月に合法化が決まったこともあり話はややこしい）。

僕が知る限り、覚醒剤に手を出した者も「いきなり覚醒剤」は少数派で、最初は大麻（もしくはベンゾジアゼピン）というケースが多い。いったん大麻に手を出すと「君は既に違法薬物に手を染めたんだ。次はもっと気持ちよくなれる○○を試そうじゃないか……」という悪魔のささやきがやってくるのだ。実は、「ゲートウェイ仮説」は現在否定的に見る向きが多いのだが、僕がこれまでみてきたハードドラッグ・ユーザーを振り返ると、この仮説に説得力がある。

もう一つ、僕が嗜好用大麻に反対する理由は「生産性が落ちる」というもの。個人的には若い大学生には留学先で勉強してほしい。大麻三昧の日々を過ごして勉強はさっぱりでした、という声は聞きたくないのだ。上手に吸入すれば大丈夫という者もいるが、僕が見聞きしてきた大麻ユーザーは、翌日にもけだるさを持ち越し、予定をキャンセルした経験があると答える者が多い。摂取した日はもちろん、翌日も車の運転は危険だ。大麻は摂取した直後はハッピーになれるのかもしれないが長い目で見ればやはりマイナスだ。

カナダは天国ではない。カナダ政府の調査によると、大麻使用者の72%が大麻は有害だと考え、55%は精神障害のリスクを上げると答えている。55%というこの数字は前年の調査時よりも減少してはいるのだが、依然使用者の過半数以上が精神障害のリスクを上げると答え、7割以上が有害と考えているのだ。それでも手を出す価値があるのか、よく考えるべきだ。

大麻は最近ますますハードルが下がり、日本にいてもその気になれば誰もが簡単に入手できる物質になった。警告しなければならぬのは我々医療者のはずだ。にもかかわらず嗜好性大麻の危険性を訴える医療者がさほど多くないのはなぜなのかについて語るべきだ。それをしないのは、医療者の中にも嗜好用大麻なのか。もしかして、一般報道で明らかになっただけでなく、水面下で医療者も少なくない？

お知らせ1

毎日新聞社主催の一般市民向け講演会（今回で4回目となります）を

今なら早期割引特価が適用されます

2020年のコロナ禍でも過去最高収益を達成した“最強クリニック”の経営術や運営ノウハウが満載！「そのまま使える」ツールやデータもDVDに多数収録しました。院長必携の1冊です。

新刊「最強”のクリニック経営術」日経ヘルスケア

お知らせ2

無料メルマガを2021年5月から配信しています。ご登録は[こちら](#)。

1

0

著者プロフィール

たにぐち やすし氏●1991年関西学院大学社会学部卒。商社勤務を経て、2002年大阪市立大学医学部卒。研修医終了後、タイのエイズ施設でのボランティアを経て大阪市立大学医学部総合診療センター所属となり、現在も同大非常勤講師。2007年に大阪・梅田に開業。日本プライマリ・ケア連合学会指導医。労働衛生コンサルタント。

連載の紹介

谷口恭の「梅田のGPがどうしても伝えたいこと」

患者さんに最も近い立場で医療を行いたい……。それを実現するため医師6年目に資金300万円で開業した谷口氏。「どのような人でも、どのような症状でも受け入れる」をポリシーに過去11年で3万人以上の初診患者を診察した経験を基に、開業医のやりがいや苦勞、開業医に求められるミッションを若手医師向けに語ります。

⊕ 連載をフォロー

この記事へのコメント（0件）

✉ コメントを書く

コメントはまだありません

この連載のバックナンバー

これからの大麻の話をしよう

2021/06/30

自身が感染源となるリスクの自覚は十分か？

2021/06/24

三密、検査内容の開示拒否、野放しの新型コロナPCR

2021/06/16

ワクチンは打てば打つほど受診が増える！？米国発の論文に

2021/06/09

今なら早期割引特価が適用されます

2020年のコロナ禍でも過去最高収益を達成した“最強クリニック”の経営術や運営ノウハウが満載！「そのまま使える」ツールやデータもDVDに多数収録しました。院長必携の1冊です。

新刊「最強”のクリニック経営術」
日経ヘルスケア